

だんじりのローカル・トラック

—大阪府富田林市東條地区を事例に—

19141038 松村由香子
指導教員 立木茂雄
(総文字数 20825 字)

だんじりのローカル・トラック
—大阪府富田林市東條地区を事例に—

[キーワード] 学歴、進路選択、地域間移動

19141038 松村由香子

要旨

「これまでの進路選択、これからの地域間移動は、何を要因に決定づけられるのか」多くの社会学者によって研究されてきたこのテーマを、「中学時代」という特定の時期に焦点を当ててインタビュー調査を行なった。

インタビュー対象者は全員同じ地区に住み、同じ小学校・中学校の卒業生である。彼・彼女らにアポイントをとってそれぞれの中学時代における考え方や環境をインタビューしていった結果、現在にいたるまでの進路選択については先行研究どおりであった。つまり、学業に対する取り組み方や受験に対する意識が後の学歴に大きく影響していたのである。しかし、今後の地域間移動においては予想外の結果となった。つまり、「だんじり」への関わり方が地元に残る・戻るという考え方に大きく影響していたのだ。当地区に根付いているだんじりに深く関わる人ほど地元で就職したり、最終的に戻ってきたいと発言していた。

本論文では、この研究を通して明らかになった、本地区をケース・スタディとした新たなローカル・トラックを提示する。

目次

- 1 はじめに
 - 1.1 背景
 - (1) 学歴社会問題
 - (2) 集落限界化問題
 - 1.2 先行研究
 - (1) 学歴社会問題について
 - (2) 集落限界化問題について
 - 1.3 目的
- 2 調査方法
 - 2.1 対象地区について
 - (1) 富田林市東條地区の概況
 - (2) 東條地区の学校について
 - 2.2 調査対象者について
 - 2.3 インタビュー方法
 - 2.4 調査における倫理的配慮
- 3 調査結果
 - 3.1 これまでの進路選択
 - (1) 学歴に影響する項目
 - (2) 学歴に影響しない項目
 - 3.2 東條地区の特殊性
 - (1) 再生産される出身地
 - (2) 豊富な文化資本
 - (3) 地域に根付くだんじり
 - 3.3 これからの地域間移動
 - (1) だんじりに参加している人について
 - (2) 地域とのつながり
 - (3) 今後地元を出るのか、残るのか
- 4 まとめ
 - 4.1 だんじりのローカル・トラック

1. はじめに

1.1. 背景

(1) 学歴社会問題

1980年代までは日本は「一億総中流」の時代であった。終身雇用制や年功序列賃金のような労働環境が整っており一般的な正社員（公務員）・主婦のパート・学生のアルバイト以外の雇用形態がほとんど無かったために、雇用格差の問題が顕在化しなかったのだ。しかし、バブル崩壊の頃から日本の中流階層は緩やかに崩れ始め、資産・所得の格差は拡大していった。このことを裏付けるように、総務省統計局のデータによってジニ係数が年々上昇しているということが分かる。ジニ係数とは、所得分布の格差を表す係数のことで、格差が小さいほど0に近い値になり、格差が大きいほど1に近い値になる。また内閣府の2015年の資料によると、相対的貧困率も1990年半ばごろからおおむね上昇傾向にあることが分かる。相対的貧困率とはOECDによって定義づけられたものであり、世帯の可処分所得を世帯人数の平方根で割って算出する等価可処分所得が、全人口の中央値の半分未満の世帯員のこととされている。

これらの社会的な格差は、雇用形態の違いによる賃金格差によってより大きくなっている。正規雇用で雇われた人は、時期の定めのないフルタイムの労働契約で働くことができるのに対し、非正規雇用で雇われた人は、一か月から一年単位の有期雇用であり、基本的にボーナスや退職金、昇給がない。学歴別の平均年収を2015年の総務省統計局の「学歴別に見た賃金」のデータで見ると、男性では大学・大学院卒が402.5千円、高専・短大卒が308.8千円、高校卒が288.2千円、女性では大学・大学院卒が287.8千円、高専・短大卒が252.5千円、高校卒が207.7千円となっており、男女ともに非大卒より大卒の方が平均年収は高くなることが分かる。さらに2001年の内閣府の「家族とライフスタイルに関する研究会報告」によって、女性の出産に伴う就業パターンの変化による生涯賃金の推計を見ても、正社員として働き続ける場合と出産退職後パートタイマーとして再び働き出した場合では、賃金だけで2億円近い差が生まれるとしている。このように正規雇用と非正規雇用の間には制度上だけでも賃金格差があることが分かる。さらに、日本は新卒一括採用の慣行が根強いというのに、非正規雇用の者は雇用期間が短く職務経験を通じた職業技能を高める機会が乏しいため、そこから正社員になることは困難であるとされている。

加えて非正規雇用者が抱える問題として、改正労働者派遣法の「雇い止め」があげられる。雇い止めとは、期間の定めのある雇用契約において、雇用期間が満了したときに使用者が契約を更新せずに、労働者を辞めさせることである。近年、契約更新の繰り返しにより、一定期間雇用を継続させたにもかかわらず、突然、契約更新をせずに期間満了をもって退職させるなどのトラブルが起こっている。前述した通り、正社員として雇用された場合は期間の定めのない雇用契約であり、定年か解雇以外で辞めさせられることはないが、期間雇用の場合は、期間満了ごとに契約を更新しないと雇用が保障されないのだ。このように正規雇用と非正規雇用どちらを選択するかによって生涯賃金や雇用の安定性は大きく異なってくるということが分かる。では皆が正規雇用で就職すればいいのではないだろうか。しかしそうもいかないということが、2014年の総務省統計局の「就業形態の多様化に

関する総合実態調査」のデータによって分かった。

2014年の総務省統計局のデータによると、15～19歳の72.8%が非正規雇用で就職している。この15～19歳というのは例外もあるが、主に中学または高校を卒業後、大学に進学せずに就職した人たちを表していると考えられる。25～29歳の非正規雇用としての就職率が28.1%であることと比べると、非大卒の多くが正社員になれていないということがわかる。さらに2015年の厚生労働省の「学歴別卒業後3年以内離職率の推移」によると、中卒の1年以内の離職率は41.5%となっている。大卒の1年以内の離職率が11.8%であることと比べると、大卒より非大卒の方が離職率は高いということが分かる。ちなみにこの統計は事業所からハローワークに対して、新規学卒者として雇用保険の加入届が提出された新規被保険者資格取得者の生年月日、資格取得加入日等、資格取得理由から学歴ごとに新規学校卒業者と推定される就職者数を算出し、更にその離職日から離職者数・離職率を算出している。加えて非大卒の方が大卒よりも犯罪率が高いというデータもある。2010年の法務省の「矯正統計」によると、同年に刑務所に入った新受刑者は、男性が24,873人、女性が2,206人で、そのうち大卒が4.6%、中卒が41.7%、高卒が25.6%となっている。このことから非大卒の割合が圧倒的に多いことが分かる。新受刑者の約4割が中卒という比率は、国民全体の中卒者は2割ほどであることを考えると、かなり高い割合であると考えられる。学歴と犯罪率に直接的な相関関係があるのかは定かではないが、大卒というステータスが今後の人生に大きく影響するのは確かである。

そして前述した雇用形態の違いによって生み出される賃金格差は、さらに子供の貧困へと連鎖していく。子供の貧困は今日の日本でも問題視されており、実際に2014年8月29日、「子どもの貧困対策に関する政府の大綱」というものが閣議決定されている。貧困の状況下で育った子供が大人になっても貧困の状況から抜け出せないほど、いわゆる貧困の連鎖によって子供たちの将来が閉ざされることは決してあってはならない。政府は子供の将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、また、貧困が世代を超えて連鎖することのないよう、必要な環境整備と教育の機会均等を図り、全ての子供たちが夢と希望を持って成長していける社会の実現を目指し、子供の貧困対策を総合的に推進することを目標にしている。具体的に教育面や生活面でのサポートや、経済支援などをおこなっている。さらに貧困の連鎖を食い止める官公民連携の政策として、「子どもの未来応援プロジェクト」というものもある。これは貧困の状況下にある子供に必要な支援が届くことを目指し、そして、新たに基金を設置し、草の根で活動するNPO等を積極的に支援するほか、子供たちの「生きる力」を育むための拠点を整備するというものである。学歴格差は本人の人生に大きく影響するほか、将来の子供たちにまで影響を与えてしまう非常に重要な要素であることが分かる。

(2) 集落限界化問題

近年、限界集落が急速に増えてきている。限界集落とは、過疎化などで人口の50%以上が65歳以上の高齢者になり、冠婚葬祭などの共同生活の維持が困難になっている集落のことである。平成28年3月において国土交通省によって発表された調査結果によると、75,662の集落のうち、限界集落は全国で15,568集落、比率は20.6%になる。いったん限界集落になると若年層が集落外へと出ていくため、より限界集落化が加速するという悪循環に陥る。集落が限界化すると、集落の自治、生活道路の管理、冠婚葬祭など共同体としての機能が急

速に衰えてしまい、やがて消滅に向かうとされている。

限界集落化の原因としては、①集落内に産業がない ②集落自体に魅力がない ③不便であるなどが挙げられる。また、集落内に移住してくる人がいないというのも問題の一つである。限界集落は人口規模も世帯数の規模も小さい集落が多く、役場（本庁）から遠い山間地や離島に多い。全国で過疎市町村の数が多いのは島根県、鹿児島県、秋田県などである。

筆者の住む大阪府も人口減少の道をたどっている。2017年10月の総務省「住民基本台帳人口移動報告」によると、他都道府県からの転入者数が11,641人であるのに対して他都道府県への転出者数は12,081人となっており、大阪府から440人流出してしまっている。さらにこのデータを大都市に注目してみると、大阪市は転入者が7745人であるのに対して転出者は7,915人、堺市は転入者が1631人であるのに対して転出者は1,765人となっている。反対に関東地方や沖縄県、愛知県、福岡県のように人口が増加している県もあるため、大阪府の人口はそういった県に流出していると考えられる。このまま大阪府から人口が流出し続ければ、大阪府にも限界集落や過疎地域が生まれてしまう可能性は十分にありえる。

以上のような限界集落化の問題に立ち向かう前に、本論文では地域間移動について考察し、何がその人を地元にとどめているのか、を明らかにしようと思う。

1.2. 先行研究

(1) 学歴社会問題に関する研究

ブルデュー（1990）によれば文化資本は3つの状態において現象する。「身体化された状態」、「客体化された状態」、「制度化された状態」の3つである。第一は、身体化された状態における文化資本であり、これは言語、知識、教養、技能、趣味、感性、性向など、個人がその成長過程において、広義の学習によって習得したり、身につけたりしたものを指している。個人による身体化というプロセスを経るが、その個人を成員とする集団に共有されることによって、この意味での文化資本は個人と集団によっての「ハビトゥス」を構成するとともに、それを継承することが当該集団の再生産と結びつく。このハビトゥスとは、個々の階級や集団に特有の無意識的な行動・知覚・判断の様式を生み出す諸要因の集合を指し、経験を通して社会的または後天的に拾得されるものである。第二は、客体化された状態における文化資本であり、絵画、書籍、道具、機械、工芸品、装飾品などのように外在化された有形の客体として存在するものである。ある集団に生まれ落ちた個人にとっては、こうした有形物が一種の生育環境を構成することになり、個人の成長過程における広義の学習を誘導する。第三は、制度化された状態における文化資本であり、証書や免状などによって社会的に認証された資格や肩書きを指しているが、これは客体化された文化資本の特殊形態と考えることができる。

これらの文化資本を習得するにあたって、家庭・両親のもとでの社会化が決定的な意味をもつ。ある層の文化資本はその次の層へと「再生産」されるのだ。したがってそれぞれの層における文化資本の配分の不平等さは、その次の層においてもまた同じように存在するため、出身階層ごとの有利・不利は簡単には変わらないということが分かる。それゆえに「格差の連鎖」は起こるといえる。これがブルデューの「文化的再生産論」である。ちなみに再生産とは生産にたいし、それとは質的に区別される別の生産のことであり、反復という意味ではない。文化資本が再生産される際は、同型的なパターンの再現にその都度新たな意味が付せられている。

このことから、子供の学歴は親の学歴によって大きく影響を受けるということが分かる。子供は親の学歴を自分の人生のスタート地点とみなし、それを目標に自身の人生設計を立てる傾向にあるからだ。学歴の親子類型は親の学歴と子の学歴の推移から「大卒再生産家族」、「学歴上昇家族」、「学歴下降家族」、「高卒再生産家族」の4つに類型される(吉川 2009)のだが、このうち日本の社会が大卒再生産家族と高卒再生産家族を基盤にしていることから、子供は親の最終学歴と同じになることが多いということが分かる。高卒層の親をもつ子供の進学に対する考え方が「できることなら進学したい」という程度の動機に基づいていることが多いのに対し、大卒層の親をもつ子供は自分の学歴を親より絶対に下げない、という切実な動機が支配している。学歴には豊かで安定した生活をするために役立つという「機能的価値」と、努力や能力の指標、身につけた教養のシンボル、そして社会的地位の上下を示すラベルとしての意味を持つ「象徴的価値」があるのだが、この場合はそのうち象徴的価値が働いているといえよう。特に母親の学歴はその象徴的価値の作用によって次世代の高学歴志向を生じさせるといふ、目に見えない効果をもっている。結果として、母親が大卒層を持っている場合、現在の暮らしぶりがどうであろうと、子供の学歴が母親の学歴を下回らないようにする動機づけがはたらいて、大学進学を強く希望することになる。このようにして現代は大卒再生産家族がどんどん数を伸ばしているのだが、その結果、格差はより大きくなってしまっている。学歴分断社会は大卒再生産家族と高卒再生産家族を圧倒的多数として、比較的少数の学歴上昇家族と学歴下降家族が「入れ替え戦」を行って大卒層と非大卒層の比率が均衡を保っている状態なのである。

また、吉川(2009)によれば親から子供への学歴の世代間移動は「上層再生産」、「上昇移動」、「下降移動」、「下層再生産」の4つに類型される。これは前述した学歴の親子類型のもととなる指標である。一億総中流社会であったころの日本は、たとえ自身が下降移動の層であっても、自分の位置づけが下がったことに気づきにくかった。それに対し、現代の格差社会における世代間移動は、上昇移動のように親の学歴を超えることが難しくなっている。そのため、人々は不平等を感じやすい。このことから上下層の固定化・閉鎖化が人々に認識されやすくなっているというところから分かる。これは、豊かさの時代変化がなくなったために、目に見える世代間関係=不平等だと、見たままを評価できるようになったためだと考えられる。

つまり、格差社会を作り出した主な要因は上下に分断された日本人の学歴だ。18才の時に大学層に入るか非大学層に入るかの人生の岐路を吉川(2009)は「学歴分断線」と名付けた。日本はその18才での進路選択に人生が一点集約されており、学歴分断線こそがのちの人生に大きく影響を与えることとなるのだ。

日本では学校トラッキングといって、アカデミック・トラックの分化が学校ごとになされ、子供たちは学齢期の早い段階から定型のトラック(道筋)に従って進路を決めていくのだが、一旦あるトラックに入ると容易に進路が変更できないという特徴がある。例えば、いわゆる底辺校に進学すれば、大学進学は難しいし、中高一貫教育の名門私立高校からは、大学進学は容易にできても、資格の必要な工業系の製造業への就職は難しいというような実態がこれにあたる。しかし地方出身者はアカデミックな進路選択とはまた違い、自らの地域移動についても選択する必要がある。その進路の流れのことを、吉川(2001)は「ローカル・トラック」と名付けた。

島根県立横田高校の進学コースに在籍していた成績優良者の地域移動を分類すると「県

内周流型」、「都市在住型」、「Jターン型」、「Uターン型」の4つに分けられる。県内周流型とは県内に進学し、県内で就職した人たち、都市在住型とは県外に進学し、県外で就職した人たち、Jターン型とは県外に進学し、県内で就職した人たち、最後にUターン型とは県内に進学し、郡内で就職した人たちのことを指す。先ほど述べたローカル・トラックの本流は県内周流型であり、横田高校の進学コースの卒業生の20.4%もが島根大学に進学している。つまり、進学先大学の難易度による単純な「輪切り」ではなく、最寄りの高ランク大学に進学していくという、地方ならではのローカル・トラックが存在することが分かる。さらに調査データによると、県内周流型の人たちは都市的アノミー傾向を強化することなく道徳性を高め、あいまいさへの耐性には変化をもたらさず維持し、権威への盲従を嫌って自己指令的に判断するようにし、自尊感情においては自己肯定化に向かわせる傾向がある。加えて調査対象である島根県横田高校出身の方たちには、ブルデューの「文化的再生産論」があてはまらない。進学コースに在籍している成績優良者の両親の学歴はあまり高くない、つまり、標準を少し下回る生活水準や文化(学歴)水準の出自であるのだ。さらに杉浦(2012)は1982年から2007年までの総務省「就業構造基本調査」をもとに、学歴が高くなるほど他の都道府県あるいは同じ都道府県の別の市町村へ移動する者の割合が高いことを確認し、労働移動は学歴が高いほど起こりやすいと述べている。李(2012)および李・杉浦(2012)もまた、2008年および2010年に実施された東北出身者及び東京圏在住者に対するモニター調査によって、学歴が高くなればなるほど移動確率が高くなること、父親が専門・技術系・管理的職業の家庭の子弟が進学時に移動していることが明らかにしている。

(2) 集落限界化問題に関する研究

65歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落を「限界集落」と提唱したのは大野晃である。集落は、大野(2008)によるとその集落の高齢人口の割合によって「存続集落(55歳未満の人口が50%を超え、跡継ぎ確保により集落の担い手が再生産されている)」、「準限界集落(55歳以上の人口が50%を超え、近い将来、後継者確保の困難が予想される)」、「限界集落」、「消滅集落(人口・戸数がゼロになり文字通り消滅)」の四つに区分される。また、武村(2017)は限界集落化のプロセスを、人口急減期から臨界点までの「限界集落化初期」、臨界点から集落臨界点までの「限界集落化中期」、臨界点から集落機能が完全に消失するまでの「限界集落化後期」、そして集落機能が完全に消失した後の「限界集落期」の4段階に区分している。この限界集落化を食い止める方法として、大野は従来の「後追い行政」に「予防行政」を対置し、「流域管理」や「ライフ・ミニマム」などの具体的提案を示している。この提案は農山村のみではなく、都市部も含め、いまや全国各地で必要とされつつある。事実、この「限界集落」問題は、すでに「限界自治体」問題へと発展しており、それが市町村区レベルから、さらには都道府県レベルへと広がっていくことを提示している。都心部でも住宅団地を中心に「限界集落」はピンポイントで表出し始めており、現在進行している事態は少子高齢化を同根とする人口減少社会の未来を先取りするものと言えよう。

また、安村(2017)は高度近代化にありながら山村であるがゆえに徹底的な近代化を免れ、都市化していないムラの実態を研究している。ムラ社会は歴史的—地理的状況の影響に規定されながらも、基本的に、住民の生活が「自然・生態系」と「体面的社会関係」の基盤の上に成り立っている。そもそも日本のムラ社会は第二次世界大戦直後まで人口の大多数派

が暮らす社会形態であったが、高度近代化を経て急速に都市化が進み、人口の少数派における生活形態となった。こういったムラが「持続不可能」問題を抱え日常生活を送っているのだ。現存する全集落数は75,662集落あり、そのうち61.9%の46,831集落が過疎地域にある。また過疎集落の特徴として①山間地にある ②役場（本庁）までの距離が遠い などがあげられる。（国土交通省2015年『平成27年度 過疎地域等条件不利地域における集落の現況把握調査報告書』）限界集落の内発的再生が1980年代初めから始まり、いまや全国的に実践されている。それはムラ社会を都市化する実践ではなく、それとは逆に、地域固有の伝統や文化を見直し、自然や生態系を守ろうとする実践である。「自然・生態系」と「体的社会関係」の基盤に基づいた限界集落の再生が期待される。

1.3. 目的

筆者は、4年間続けてきた塾講師のアルバイトを通して多くの子供たちと関わってきた。生徒たちがさまざまな偏差値の高校や大学へと進学していくのを見て、子供の環境や考え方が学歴にどう影響するのかに興味をもつようになった。

そこで、筆者は自身が通っていた小学校・中学校の卒業生である同級生10人にインタビュー調査をおこなって、中学時代の環境や考え方を深く聞き出し、学歴との関係を考察することにした。ちなみに本調査は吉川（2011）が『学歴社会のローカル・トラック』の中で、ひとつの高校の卒業生に焦点をあてて調査をおこなっていたのを参考にしている。

中学時代の環境や考え方はこれまでの進路選択にどう影響しているのだろうか。また、何がこれからの地域移動に影響しているのだろうか。今回の調査を通してこれからの地域移動を決定づける新たな要因が明らかになった。

東條地区のケース・スタディを通して、先行研究にはなかったこれからの進路移動を決定づける新たな要因を提示することを本論文の目的とする。

2. 調査方法

2.1. 対象地区について

- (1) 富田林市東條地区の概況

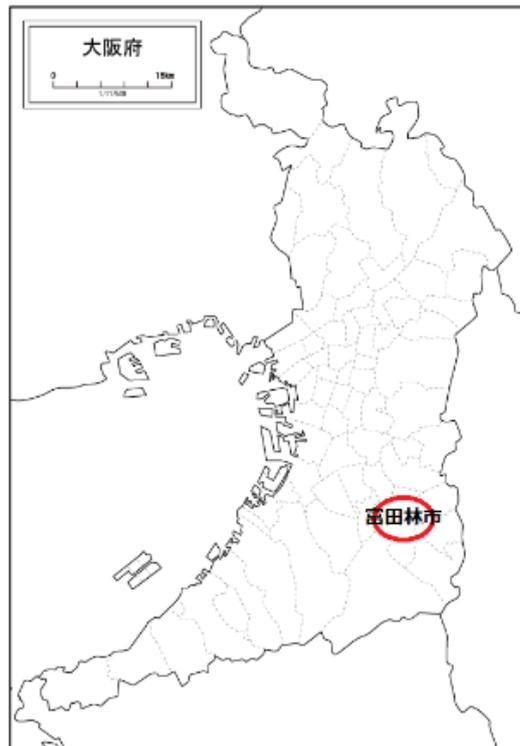


図1 大阪府の地図

出所：白地図専門店（2017）をもとに作成

富田林市は図1にあるように大阪府の東南部に位置する、「富田林市ウェブサイト」によれば2017年11月30日現在、人口は113,003人で、そのうち28.7%の32,461人が65歳以上である。

1889（明治22）年、町村制施行に際し、富田林市域に富田林村・新堂村・喜志村・大伴村・川西村・錦織村・彼方村・東條村の一町七村が発足する。1942（昭和17）年、東條村を除く一町六村を廃し、それら全区域が合併して富田林町となり、更に1950（昭和25）年に単独市制を施行して富田林市が誕生した。

さらに東條村が1957（昭和32）年に富田林市に編入して、現富田林市域がある。東條地区は図2に示すように東は河南町、南は千早赤阪村に隣接し、農家を中心とした旧村と数か所の新興住宅から成り立ち、自然環境にも恵まれている。佐備、龍泉、甘南備、山手町から成る地区で、嶽山の東麓を北流する佐備川の流域を占め、楠木正成夫人久子が誕生した地としても知られている。人口は佐備が986人、龍泉が426人、甘南備が671人、山手町が719人と合わせて2,802人の地区である。65歳以上が52%の1,458人を占めるため、限界集落とみなされるかもしれない。

当時の東條村について、『明治の頃の山村の生活』（1982）の中ではこう語られている。



図2 東條地区の地図

出所：白地図専門店（2017）をもとに作成

東と西は山に限られ、南も山にせき止められて、三方に屏風を立てたようで、北の一方だけが開け、佐備川は南から北に流れ、道もこれに従って北に通じ村の出入り口となっている。狭い谷をへだて、山裾をぬって高い石垣を積んだ家が点々と建てられ、少し平坦な所に集落をつくっている。

だから冬温かくこたつ谷ともいわれ、農産物もよく出来る。細長い一村は、一筋の道によって富田林へ出るので他の字の人達とも互いに顔見知りで、心安く交わりも深く、全く他村の人のはいる隙間もなく、一村は一家のようで、嫁入り、病人、出産葬儀や家の中のいざこざまで村中の話題に上り、人情に厚く水のきれいな佐備川の流水の様に、住みよい素朴な環境にあり、隔絶した別天地であった。

こんな狭い谷、行き止った谷だったので、世帯の移動、人口の増加は少く、10年、20年たっても左程の変化もない代りに、発展性や、成功者も少ない様に思われる。

それまで東條地区は都市計画区域外となっていたが、1969（昭和44）年に都市計画法が改正されたのを機に、富田林市の都市施設や土地利用に関しすべての事項を一体的に、かつ総合的に計画するため、東條地区の都市計画区域編入について知事に申請された。そして計画的に市街化をはかるべき区域と当面市街化を抑制すべき区域を定め、農業との調和のとれた合理的な土地利用がおこなわれるよう市街化区域、市街化調整区域の制度が設けられた。ちなみに市街化区域とはすでに市街化を形成している区域と、その周辺の区域で計画的に市街化をはかる区域のことだ。この区域では用途地域、道路、公園、下水道、学校などの計画を定め、市街地の整備をすすめるとともに、民間の開発については、開発許可制度によって一定の水準が確保される。また、市街化調整区域は市街化を抑える区域のことで、この区域では都市を結ぶ道路下水道、計画的に行われる大規模な開発、区域内に住む人々の生活

を維持するもの以外は、原則的に開発できないことになる。一方、農地や緑地の保全をはかり、農業を振興する施策が積極的に行われる。

さらに、1972（昭和 47 年）に市街化調整区域全体が農業振興地域に指定された。今後の農業振興の基盤となる地域として国の補助事業や融資事業が積極的におこなわれたため、現在も土地をもっている人が多いと考えられる。このころ現在「山手町」と呼ばれる新興住宅地が誕生した。当時の地図には「大登興産富田林ニュータウン」と記載されている。（『精密住宅地図』吉田地図株式会社，P105）

(2) 東條地区の学校について

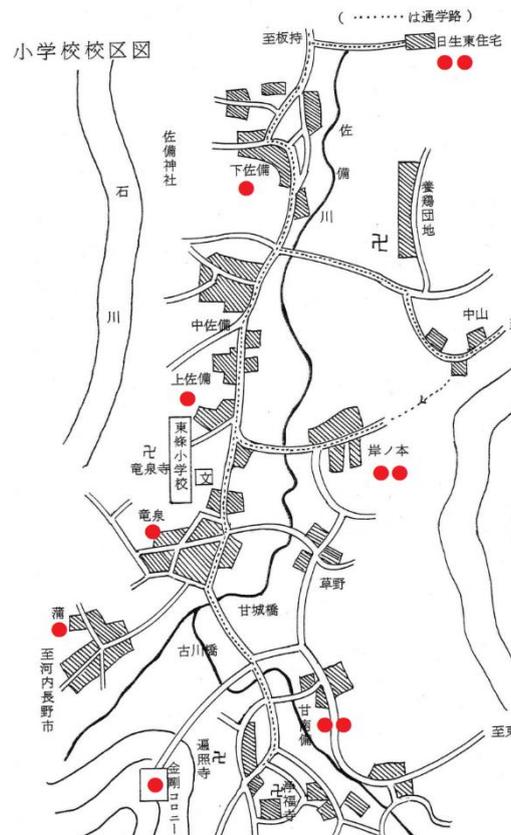


図 3 東條小学校校区

出所：学校要覧 をもとに作成

筆者の通っていた小学校は、緑豊かな自然の中にある全校生徒が 100 人に満たないような小さな小学校である。校区が広く、バスで通う生徒もいた。先ほど述べた「山手町」は、図 3 の中では「日生東住宅」と記載されている。なお、当時筆者のいた六年一組（一クラスしかないが）は 34 人いた。1872（明治 5）年、分校設置令により、佐備村は旧郷倉を修理して佐備小学校を設置し、佐備村・龍泉村の児童を収容、甘南備村は遍照寺を仮校舎として甘南備小学校を設置、甘南備村の児童を収容した。1957（昭和 32）年、東條村が富田林市に編

入した年に、大阪府富田林市立東條小学校と改称された。

東條小学校に通う生徒は全員、私立受験する生徒を除いて、富田林市立第三中学校（以下、第三中学校とする）に入学する。第三中学校は1971（昭和46）年に急激な人口増加に対処するため開校した、東條小学校、彼方小学校、大伴小学校の3つの小学校から成る中学校だ。2016年度の生徒数は442人である。富田林市西部の丘陵地帯の開発による急激な発展に比べ、本市を南北に流れる石川より東側は人口も少なく、生徒数はゆるやかなカーブを描いて自然減の傾向にある。また、東條小学校と同じく広い校区のため、多くの生徒がバスや自転車で通学している。

2.2. 調査対象者について

今回の論文を作成するにあたって、インタビュー対象として同じ東條小学校に通い第三中学校に進学した同級生10人にアポイントをとり、聞き取り調査をおこなった。なお、筆者も東條小学校、第三中学校の卒業生で、10人のインタビュアーとは同級生である。本論文は筆者を加えた11人のデータの統計を取り、それをもとに考察をおこなっている。11人のうち、男性が7人、女性が4人で、小学校時代住んでいた場所は図3のように、校区内に満遍なく散らばっている。インタビュアーは中学校を卒業後働いている人、高校を卒業後働いている人、現在大学に通っている人、結婚して子供がいる人など様々である。なお、現在も東條地区に住んでいるのは11人中8人で、後の3人は家族全員で引っ越した人が2人、結婚して家を出た人が1人である。

2.3. インタビュー方法

この聞き取り調査は、対象者の許可を得て全てICレコーダーに録音している。インタビューで録音した音声データは、インタビューに参加した人および研究者が聞くことができるようにする。インタビューの方法は、調査員（筆者）が提示したトピックについて回答者が自由に答えるというものである。まず対象者に、調査のあらましを話す。そして、各自の現在の生活の状況から話し始めてもらい、就職活動、大学生生活、大学受験、高校受験と順次過去にさかのぼって、中学時代までの出来事を述べてもらう。その際、会話に無理やりに質問の構造を与えるのではなく、できるかぎりトピックに従って行ったり戻ったりするように努めた。それゆえにインタビュー時間も一律ではない。また、インタビューに抵抗感を抱かないよう、複数人でインタビューをおこなったり、カフェや居酒屋など様々な場所でおこなったりと工夫した。

それぞれのライフヒストリー音声情報の全ては、テキスト・データとして入力して文字情報として整理した。なお調査対象者のプライバシーを守るために、氏名については、掲載順にアルファベットを振った。こうして本論文は11人のこれまでの進路選択からこれからの地域間移動までを追っている。

2.4. 調査における倫理的配慮

聞き取り調査をおこなう際は、以下の「社会調査倫理綱領」に従うこととする。

社会調査士資格認定機構「社会調査倫理綱領」

第1条 社会調査は、常に科学的な手続きにのっとり、客観的に実施されなければならない。調査者は、絶えず調査技術や作業の水準の向上に努めなければならない。

第2条 社会調査は、実施する国々の国内法規及び国際的諸法規を遵守して実施されなければならない。調査者は、故意、不注意にかかわらず社会調査に対する社会の信頼を損なうようないかなる行為もしてはならない。

第3条 調査対象者の協力は、自由意志によるものでなければならない。調査者は、調査対象者に協力を求める際、この点について誤解を招くようなことがあってはならない。

第4条 調査者は、調査対象者から求められた場合、調査データの提供先と使用目的を知らせなければならない。調査者は、当初の調査目的の趣旨に合致した2次分析や社会調査のアーカイブ・データとして利用される場合および教育研究機関で教育的な目的で利用される場合を除いて、調査データが当該社会調査以外の目的には使用されないことを保証しなければならない。

第5条 調査対象者が求めた場合には、調査員は調査員としての身元を明らかにしなければならない。

第6条 調査者は、調査対象者のプライバシーの保護を最大限尊重し、調査対象者との信頼関係の構築・維持に努めなければならない。社会調査に協力したことによって調査対象者が不利益を被ることがないように、適切な予防策を講じなければならない。

第7条 調査者は、調査対象者をその性別・年齢・出自・人種・エスニシティ・障害の有無などによって差別的に取り扱ってはならない。調査票や報告書などに差別的な表現が含まれないよう注意しなければならない。調査者は、調査の過程において、調査対象者および調査員を不快にするような性的な言動や行動がなされないよう十分配慮しなければならない。

第8条 調査対象者が年少者である場合には、調査者は特にその人権について配慮しなければならない。調査対象者が満15歳以下である場合には、まず保護者もしくは学校長などの責任ある成人の承諾を得なければならない。

第9条 記録機材を用いる場合には、原則として調査対象者に調査の前または後に、調査の目的および記録機材を使用することを知らせなければならない。調査対象者から要請があった場合には、当該部分の記録を破棄または削除しなければならない。

第10条 調査者は、調査記録を安全に管理しなければならない。とくに調査票原票・標本リスト・記録媒体は厳重に管理しなければならない。

3. 調査結果

3.1. これまでの進路選択

中学時代の環境や考え方は後の進路選択にどう影響しているのだろうか。これから、11人がどのような中学時代を過ごし今の進路を選択したのか、また自分や周りの進路選択についてどう考えているかをインタビューの会話を引用しながらまとめていく。その際11人のこれまでの進路選択を「高校を卒業後大学へ進学」が6人、「高校を卒業後就職」が3人、「中学を卒業後就職」が2人の三つに分類して紹介していく。なお、専門校卒は吉川(2001)によると高卒とされるので、今回は「高校を卒業後就職」に分類した。

aくん	bくん	cさん	dくん	eさん	fさん	gくん	hくん	iくん	jくん	筆者
大学生	大学生	中卒	中卒	高卒	大学生	高卒	高卒	大学生	大学生	大学生

(1) 学歴に影響する項目

まず「中学時代どのくらい学業に取り組んだか」について結果を紹介していく。この質問の回答から、中学校の雰囲気がよく伝わってくる。初めに紹介する大学生のaくんは、来春から公務員への就職を控えている。

頭いい中学校、真面目な中学校じゃなかったやん。クレイジーなやつが多かったやん。例えば〇〇くんとか、提出物出さへんかったやん。出さんでいいんやって思ってて。やってんねんけど、提出すんの忘れてて(笑)周りだしてないから。それで中学一年生二年生の成績ものすごく悪くて。教科によってはよかってんけど。

ちなみに彼は非常に真面目な生徒で、授業態度はとてもよかったと即答してくれている。取り組み度はその授業によると回答してくれたのは、これまた大学生のbくん。

理科の授業、映画観てたときあったやん。あの時点でまずちゃんとした授業じゃないやん。割と学校がちゃんとした授業じゃなかったっていう部分もあるし。技術とかちゃんとした？って言われたらしてないやろ。だから授業によってはしてる授業としてない授業とある。

彼も提出物はきちんと出し、テスト勉強も計画的におこなっていたそう。このように大学生の人たちは周りの環境に影響されて授業をきちんと受けていないという人が多かった。中学校は教育の水準が低く意欲的に勉強に取り組む生徒が少なかったため、授業として成り立っていないものも少なくなかったのだ。小学生のうちから塾に通っていた人が多いため、学校の授業を聞かなくても勉強についていけたのだろう。筆者もその中の一人であるが、周りが勉強していない環境で一人黒板に集中することがなんとなく嫌だったから、塾の授業は一生懸命聞いたが学校の授業は全く聞いていなかった。

一方、授業中「聞いていなかった」「寝てた」と回答したのはほとんどであった。高校を中退し、結婚して子育てに奮闘しているcさんや、高校を中退して現場職で働いているdく

んは、「勉強が大嫌いだった」とも回答している。

		aくん 大学生	bくん 大学生	fさん 大学生	iくん 大学生	jくん 大学生	筆者 大学生	eさん 高卒	gくん 高卒	hくん 高卒	cさん 中卒	dくん 中卒
学業	授業	○	△	△	○	×	△	△	×	×	×	×
	宿題	△	○	○	○	○	○	○	△	×	△	×
	テスト	○	○	○	○	△	○	○	△	×	△	×

次に進路選択について、全員が高校へ進学しているのだが、いつごろから受験を意識して勉強を始めていたのだろうか。

高校を卒業後、専門高校に入学して今は事務の仕事をしているeさんは「ずっと塾行ってたから、自然とその意識はあった。自然な流れやった。」と回答。小さい頃からECCに通っていたfさんは「英語がしたかった。受験勉強もぜんぜんしてなかった。」と回答するように、小学校から塾に通っていた人たちは受験に向けて気持ちを切り替えたり、勉強法を変えたりということは特になかったようだ。一方高校を出て、専門学校に進学するも理想と現実の不一致からその夢を諦め、今は現場職で働き、いずれは実家の家業を継ぐ予定のgくんは、中学三年生になってから気持ちを切り替えたという。

そんなgくんは、大卒の人に対して「いうたら悪いけど、大学行っても三流大学やったら一緒やと思うねんか。……別にええ大学出てもここ（現場職）来たら関係ないわけやし。」という印象を抱いているそうだ。dくんも

ハナからスーツびしっと決めて、サラリーマンっていうか営業マンとか、会社で働いてる人おるやんか、あんなんやったら学歴いるんかもしらんけど。道によって学歴っていうのついてくるから……

と、自身の思いを聞かせてくれた。職種によって必要なものはそれぞれ違う。筆者はこの言葉を聞いて、一概に学歴が重要だと唱えるのは見当違いであると感じた。

また、子供の学歴は親の学歴によって影響を受けるという先行研究を裏付けるように、インタビューアの親の考え方を本人たちも受け継いでいることが分かった。例えば、bくんは親と同じ高校に行くことを小学6年生の時点で選択していた。gくんは「俺は昔からお前は男やねんから大学は出とけよってずっと言われて、育てられてきた。」というし、中辻くんは「(高校)辞めたときはめっちゃ怒られた。おっさんにどつかれたし。……だから転入して、その高校行って。通信の。」と回答してくれた。cさんは高校進学に対して

働こうと思っててんけど、とりあえず受けるだけ受けて、落ちたら働いたらええねんってなってな。そう考えたから、うちんちみんなな。もともと頭悪いのも分かってるし、強制的に行けではなかってんけど。

と語る。今回のインタビューを通して親が子供に高校進学を望むかどうかが、高卒と中卒の分かれ目になっていることが分かった。

	aくん	bくん	fさん	iくん	jくん	筆者	eさん	gくん	hくん	cさん	dくん
	大学生	大学生	大学生	大学生	大学生	大学生	高卒	高卒	高卒	中卒	中卒
塾	小6～	小6～	小6～	x	中2～	小6～	小5～	中3～	中3～	x	中3～
大学には								行きたい	行きたい	行かない	行かない

(2) 学歴に影響しない項目

最後に課外活動への取り組みについて結果を紹介する。興味深いことに、11人全員が何かしらの部活動に所属していた。これは中学校の方針であったのではないかと考えられる。そのうち途中で退部したり転部したものが5人いた。通信制の高校を卒業後、いくつかの職業を経て今の仕事に就いているhくんは「俺、二年間やって三年に辞めた。いろいろあったよね（笑）仲悪くなって。」と語ってくれた。人間関係がうまくいかずに辞めてしまったそうだ。

大学生のfさんも同じ理由である。

疲労骨折なって、でもなったから辞めるんじゃないくて、それを口実にして辞めた感じ。普通に走ってしんどいやん？なんで走らなあかんねんやろって。……なんか友達とかめんどくさかった。先輩とか。

gくんは、所属していた部活動についてこう語っている。

俺は、練習に関してはめちゃくちゃ遅刻してたし、やばい、遅刻した！怒られる、休も。みたいななんもあつたけど、正直練習は多分一番してた。自主練はめっちゃしてた。家にゲーム機無いからずっとボールこやって跳ねて。砂利で跳ねてボール飛んでって、坂の下転がってひらいに行つてって何回もして、それでも暗くなるまでずっとバスケやって。体格もあつたから自分らの代なつてからはずっとレギュラーで出させてもらつて。部活動でいうたら、バスケはよかつた。中学生の思い出は…部活が一番楽しかつたかなあ。

	aくん	bくん	cさん	dくん	eさん	fさん	gくん	hくん	iくん	jくん	筆者
	大学生	大学生	中卒	中卒	高卒	大学生	高卒	高卒	大学生	大学生	大学生
部活動	△剣道部	野球キャブ	○バスケ	△バスケ	○テニス	△陸上部	△バスケ	○バスケ	テニス、剣道	○バスケ	吹奏楽キャブ

また「行事にどのくらい取り組んだか」については、第三中学校の二大行事である「文化発表会」と「体育祭」に二分化されていた。特に第三中学校は毎年文化発表会にとっても力を入れており、普段不真面目な生徒も文化発表会には一生懸命取り組む。文化発表会で優勝した当時の3年2組だった人たちは、みんな文化発表会の方が楽しかつたと回答している。

gくん「体育祭より、文化祭の方が思い出でかいで。」

dくん「俺らスバルホール行ったやん。」

gくん「俺らのクラスが最終選ばれて。あれは思い出残ったね。」

dくん「おもしろいことも、嫌なこともあつたけど、よかつた。」

gくん「クラスが団結して。体育祭も団結してたけど。」

dくん「あっち（合唱コン）の方が熱入ってたで。」

……

gくん「言い方悪いけど、目立った子と目立ってない子がおるけど、歌って好きな子多いから声でやん子がおったら誰かが大きい声出したら乗っかりやすいから、ってのもあったし。」

dくん「あれは思い出残ったよ。」

gくん「絶対優勝するやんって思ってたもんな。」

dくん「いまだにあれは忘れてないよ。」

	aくん	bくん	cさん	dくん	eさん	fさん	gくん	hくん	iくん	jくん	筆者
	大学生	大学生	中卒	中卒	高卒	大学生	高卒	高卒	大学生	大学生	大学生
行事	大学生	体育祭	体育祭	合唱コン	高卒	合唱コン	体育祭	合唱コン	大学生	大学生	体育祭

以上のことから、学業に対する態度や進路選択に対する意識は将来の学歴に影響しているが、部活動や行事への取り組み方は学歴に影響しないということが分かった。

3.2. 東條地区の特殊性

(1) 出身地の再生産

インタビューを重ねていくうちに、東條地区にある特殊性を発見した。

まず、インタビューアの親の出身地は本人と同じように東條地区、つまり東條小学校や第三中学校出身である人が11人中8人で72.7%もいる。ほとんどが東條地区に土地を持っていて、昔からそこに住んでいると考えられる。gくんのように実家が家業を営んでいて代々そこに住んでいるケースもある。

俺の場合は、うちは由緒正しきg家やから、先祖代々あっこで住んでて、俺が九代目か十二代目やねん。だいたい30歳で息子に託していくねん。で考えたら単純計算で270年同じところに住んでんねん。それを自分の代で潰すかって言われたらできひんっていうのもあるし、昔からそういう風に育てられてきてるっていうのもあるし。

東條地区で育ち、お嫁さんやお婿さんもらい、子供をまた自分と同じ小学校や中学校に通わせる人が多いということだ。あとの3人は、1人は父親の就職先が東條地区であるため移り住んできて、もう2人は新興住宅地「山手町」に親の代から住んでいる。昔から住んでいますか？という問いに対して、fさんは「二人とも（出身は）羽曳野。じいちゃんが（山手町に）勝手に家建ててん。結婚のお祝いとして。」と答えてくれた。つまり新興住宅地「山手町」を除いて、外から東條地区に移り住む人がほとんどいない。gくんはこう語る。

逆にうちらで越してきてってほうが少ないんちゃん？土地やすいから越してくるってのはあるかもしれんけど。うちも今向かいの家堺から若夫婦住んでて。なんかカフェしたいねんて。古民家をリノベーションして今してはんねん。そんなんに憧れて、以外でただ単に住もって思う人はまあおらんと思うけどな。実際空き家も増えてきたし。やっぱ出ていく人多いな。

実際に筆者の家の周りも昔からそこに住み続ける人や、結婚して一旦外に出るが、子供が大きくなってから東條地区に家を建てて戻り住む人ばかりだ。ちなみに筆者の家は後者にあたり、筆者は小学六年生の時に東條小学校に転入した。

(2) 豊富な文化資本

次に、各家庭の文化資本の豊富さが挙げられる。特にブルデューの文化資本論による、客体化された文化資本の豊富さが顕著に現れている。例えば、ピアノの所有率は11人中10人で90.9%（内一人キーボード、一人電子ピアノ）、仏壇の所有率は11人中8人で72.7%である。ピアノの普及率は23.6%（内閣府統計表、主要耐久消費財等の普及率（全世帯）、2004）、仏壇の保有率（2人以上で暮らす世帯）は39.2%（インブルームス調査、2013）であることから、これは非常に高い所有率であることが分かる。

	aくん 大学生	bくん 大学生	cさん 中卒	dくん 中卒	eさん 高卒	fさん 大学生	gくん 高卒	hくん 高卒	iくん 大学生	jくん 大学生	筆者 大学生	割合
絵本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	90.90%
図鑑	○	×	○	○	×	○	○	○	○	×	○	72.70%
ピアノ	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	90.90%
絵画	×	○	×	○	×	○	○	○	○	×	○	63.60%
骨董品	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	81.80%
乾燥機	×	×	○	○	×	×	○	○	×	○	×	45.40%
食洗器	○	×	○	○	○	○	×	○	○	×	○	72.70%
蔵	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○	○	45.40%
仏壇	×	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	72.70%

(3) 地域に根付くだんじり

さらに、東條地区ではだんじり文化が地域に根付いている。だんじりとは、日本の祭礼に奉納される山車に用いられる西日本特有の文化である。だんじりと言えば岸和田のだんじりがはじめに思い浮かぶかもしれないが、南河内地域（特に富田林市、河内長野市、太子町、河南町、千早赤阪村）にも60台ほどのだんじりがある。東條地区にも三つのだんじりがあり、十月に祭礼で地区全体が盛り上がる。だんじりのある地域には「青年団」という地域の祭事の際に集まり、祭事の運営や祭事に参加する組織が存在するのだが、青年団に入っている人は男性7人中5人で71.4%と非常に高い参加率である。秋になると、平日の昼間は学校や仕事に行き、夜は青年団の寄り合いに参加してと多忙な日々を過ごしている。今回のインタビューもちょうど祭り直前の最も忙しい時期であったのだが、みんな仕事が終わった夜や、寄り合いが始まるまでなどに時間を作って快く応じてくれた。仕事と青年団の両立について、dくんとgくんはこう語ってくれた。

dくん「学校のときって高校のときも、俺祭り行ってたから寄り合い遅なったりとかして、次の日学校行くの邪魔くさいから休んだらとか思ってたけど、今仕事しだして、行かな絶対あかんっていう考えが頭にある。休んだらあかんねん、とりあえず。学生とは違うなあ。」

gくん「俺ら青年団入ってて、祭りのことはすごい大事やけど、正直他の職場の人からしたら、祭りはお前の好きでやってるわけやから、それで仕事に支障がでるのはおかしいんちゃうか、って考えを持ってるから。別にそこは理解してもらおうじゃなくて、その分自分が頑張らなあかんから。」

また、女性 4 人のうち 1 人がだんじり好きで、旦那さんの実家がある千早赤阪村のだんじりを毎年見に行っているそうだ。旦那さんとは中学生のときから付き合っていて、そのころから毎年見に行っているうちにそこのだんじりが好きになったという。今年は子供が生まれた年であったため見に行けなかったそうなのだが、「来年は子供連れてベビーカーでだんじり追いかけるつもりやで！」と語ってくれた。

	bくん	dくん	gくん	hくん	jくん	aくん	iくん	cさん	eさん	fさん	筆者
	大学生	中卒	高卒	高卒	大学生	大学生	大学生	中卒	高卒	大学生	大学生
だんじり	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×

3.3. これからの地域間移動

(1) だんじりに参加している人について

このように学歴に関係なく、11 人中 6 人がだんじりに関わっていることが分かったのだが、彼ら・彼女らはいつからだんじりに興味を持ち、参加しているのだろうか。

6 人にいつからだんじりに興味を持っていたのか聞いたところ、6 人ともが「物心つく前から「小さい頃から」と回答してくれた。また、そのきっかけが親だという人が多かった。親もだんじりが好きで、幼いころからだんじりを見に行ったり関わったりしていたため、本人もだんじりが好きになったという再生産のケースが一般的であると考えられる。

東条地区には三つの地区にだんじりがある。青年団に入った時期は中学生から高校生までと様々であった。だんじりがある地区に住んでいる人はその地区の青年団に入っているが、そうではない地区に住んでいる d くん、h くん、g くんはいずれも友達や先輩に誘われて入団していることが分かった。先ほど紹介した c さんもだんじりのない新興住宅地に住んでいるが、彼氏の影響でだんじりを好きになっている。このことから、だんじりに興味をもつのに住んでいる地区は関係ないということが分かる。

親戚が岸和田にいて、小学校 3 年生ぐらいから中学 3 年生まで岸和田のだんじりを曳きに行っていた d くんは、はじめは南河内のだんじりに関心はなかったのだが、先輩に誘われて青年団に入団したところ、南河内のだんじりの面白さに気づいたそうだ。岸和田のだんじりと南河内のだんじり、それぞれの魅力について「岸和田はだんじりの彫物の物語が各町で違うところがええよ！その町で昔あった出来事とかを題材にしてるのが好きかな！南河内は岸和田に比べて彫物の数は少ないけど、だんじりの周りに木枠取り付けられててそれを利用して横ゆらししたりするところが魅力があっていいよ。」と語ってくれた。また、g くんいわく、青年団は「上下関係や青年団でしか経験できやんようなことを学べ」る場所だそうだ。みんなが「可能な限り」「命ある限りだんじりと関わり続け」たいと熱く語ってくれたことから、青年団は地域の結びつきが非常に強いコミュニティであることがうかがえる。

(2) 地域とのつながり

この調査は非常に興味深い結果となった。11 人に中学校は楽しかったか尋ねたところ、「楽しかった」と回答したのは 11 人中 4 人。「そこそこ楽しかった」と回答したのは 3 人。「楽しくなかった」と回答したのは 4 人という結果になった。

「楽しかった」と回答したのは、中学または高校を卒業後、現在就職している人たちである。この結果について g くんは、学生時代の思い出が中学までしかないため、印象が強く残

るのではないかと考察している。

次に「楽しくなかった」と回答したのは、現在大学に通っている人たちである。そのうちの一人、fさんは中学時代についてこう語っている。

まず三中の人が好きじゃなかったから。生きづらいわーみたいな。特に東条やったからかなあ。急に得体の知れん団体と一緒に過ごさなあかんやん。価値観も全然違うしなあ。だから、三年間慣れへんかった。……ほとんどの人と性格合えへんかった。住む世界違くなって中学校のときから思った。家庭が違くなって思った。楽しいって思うことも違うし、なりたいてって思うことも違うしさ、「普通」が自分は好きやのにあの子らは「悪いこと」が好きやんか。なんか、平凡を望んでたのにテンションが合わんかった。

また、iくんは

中学校のころは、毎日毎日どうやって、死なずに生きていこうかなって考えてた
(笑) 辛かったから。まあ死にたいは嘘やけど、わりかし上手くいってなかったから。

と回答している。

最後に「そこそこ楽しかった」と回答したのは、専門大学を卒業し現在は働いているeさんと、現在大学に通っているbくんと山際くんである。eさんは中学時代に対して「なんも考えてなかった。好きでもないけど嫌でもない。」と回答している。

一方bくとjくんは、

bくん「そこそこ。……中学になったらさ、悩みごととかちやんとしだすやん。小学校もしてた(=悩んでた)けどさ。人間関係も複雑になっていくわけやしさ。」

jくん「悩みあったなあ、中学校はあったわ。野球。辞めたいな一って。辞めてすっきりした。でももう一個の悩みが出てきて。俺高校行けるかなっていう悩みがでてきた。野球やってたらさ最悪野球で高校行ったりとか考えてたけど、辞めてもうたから、ほんまに行けんかなって。一瞬だけな。それで塾いったみたいな。」

と語ってくれた。やはり多感な中学時代、人間関係や部活など悩みごとはあったものの、fさんやaくんのように特別嫌な思い出として残っている様子はなさそうだった。特にbくとjくんについては、大学生であるため「楽しくなかった」という回答になると仮説をたててインタビューに臨んだため、筆者にとって意外な結果となった。なぜだろうか。この非常に興味深い結果について原因を考察した結果、bくとjくんは大学生でありながら青年団に参加していることに気づいた。つまり、<だんじりに関わっている人ほど中学校が楽しい>という関係が見えてくる。だんじりに参加することによってその地域での先輩や同期とのつながりができる。そこから、部活動やクラスメイトとの交流も盛んになっていくのではないか。

	bくん	dくん	gくん	hくん	jくん	aくん	iくん	cさん	eさん	fさん	筆者
	大学生	中卒	高卒	高卒	大学生	大学生	大学生	中卒	高卒	大学生	大学生
だんじり	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×
中学楽しさ	△	○	○	○	△	×	×	○	×	×	×

さらに今も東條地区の人と友好関係があるかという質問に対して、当然のことではあるが、だんじりに関わる人ほど今も東條地区の人と友好関係があるという結果が出ている。しかも、中学時代からずっと仲が良かったわけではなく、中学卒業後仲良くなることが多い。

hくん：ここは幼稚園から一緒やから（仲いい）。

gくん：青年団で入ってて、となり（の青年団）やけど一緒におる。会ったら話すし、って感じやんな。別に遊びに行こうって連絡来ても、ええで、いつにする？って感じで。やっぱ青年団は強い。

dくん：地元で祭りやったりとかそういう組織に入ったりしたら、交流深いし、一生の連れになってるな。

(3) 今後地元を出るのか、残るのか

調査の最後に、今後東條地区を出る予定はあるのかを尋ねてみた。現在地元で働きながらだんじりに関わる人たちはそろって地元に残ると答えてくれた。中でもgくんは「俺は出ていこうと思ってるけど、帰ってこようと思ってる」と言う。自身の家業を継ぐ必要があるし、兼業で農業もやっているためであろう。また、cさんも自身が通っていた中学校の校区内に家を建てて、子供もまた同じ中学校に通わせたいと話している。また、現在大学生でだんじりに関わるbくんとjくんは、春から社会人になって地元、大阪を出ていく。しかしこの質問に対して二人は口をそろえて「帰ってくる」と答えてくれた。一方、だんじりに関わっていないfさんは「絶対ない！絶対ない。」と回答している。（なお、現在東條地区から引っ越したeさんとaくんも特に戻る意思はなかった。）

このことから、現在の職業に関係なくだんじりに関わる人ほど地元に残るまたは戻る意思があることが分かった。

	bくん	dくん	gくん	hくん	jくん	aくん	iくん	cさん	eさん	fさん	筆者
	大学生	中卒	高卒	高卒	大学生	大学生	大学生	中卒	高卒	大学生	大学生
だんじり	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×
中学楽しさ	△	○	○	○	△	×	×	○	×	×	×
地元にいる	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×

4. まとめ

4.1. だんじりのローカル・トラック

中学校卒業から現在にいたるまでの進路選択については仮説通りであった。つまり、学歴が高い人ほど学業に一生懸命取り組み、小学生から学習塾などに通っており、受験に対する意識も当たり前として彼・彼女らの中に存在している。また、これからの地域間移動については、だんじりが大きく影響しているということが分かった。つまり、学歴に関わらず青年団に入るなどしてだんじりと関わっている人たちは、地元に残る・戻る可能性が極めて高いという結果となったのだ。この地域間移動のことを、吉川（2001）のいう「ローカル・トラック」ということばを借りて「だんじりのローカル・トラック」と名付ける。

最後に、今後の課題について述べる。本論文の研究の際インタビューアとして協力してくれた10人は、その進路選択も様々であった。しかしその中に、「中学・高校を卒業後就職」して「だんじりに関わっていない」人がいなかった。次回はそういう人にもインタビュー調査をおこない、地域間移動に「だんじり」がどれだけ大きく影響するのか検討していきたい。

[インタビュー結果]

		aくん 大学生	bくん 大学生	cさん 中卒	dくん 中卒	eさん 高卒	fさん 大学生	gくん 高卒	hくん 高卒	iくん 大学生	jくん 大学生	筆者 大学生	
<中学校について>													
学業	授業	○	△	×	×	△	△	×	×	○	×	△	
	宿題	△	○	△	×	○	○	△	×	○	○	○	
	テスト	○	○	△	×	○	○	△	×	○	△	○	
課題活動	部活動	△剣道部	○野球キャブ	○バスケ	△バスケ	○テニス	△陸上部	△バスケ	○バスケ	テニス、剣道	○バスケ	吹奏楽キャブ	
	行事		体育祭	体育祭	合唱コン		合唱コン	体育祭	合唱コン	体育祭	体育祭	体育祭	
人間関係	友達		バラバラ	部活	小学校	小学校	小学校	小学校	小学校	バラバラ	小学校	クラス	
		aくん 大学生	bくん 大学生	cさん 中卒	dくん 中卒	eさん 高卒	fさん 大学生	gくん 高卒	hくん 高卒	iくん 大学生	jくん 大学生	筆者 大学生	
	大学には			行かない	行かない			行きたい	行きたい				
<中学時代の家庭環境>													
		aくん 大学生	bくん 大学生	cさん 中卒	dくん 中卒	eさん 高卒	fさん 大学生	gくん 高卒	hくん 高卒	iくん 大学生	jくん 大学生	筆者 大学生	割合
客体化	絵本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	90.90%
	図鑑	○	×	○	○	×	○	○	○	○	×	○	72.70%
	ピアノ	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	90.90%
	絵画	×	○	×	○	×	○	○	○	○	×	○	63.60%
	骨董品	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	81.80%
	乾燥機	×	×	○	○	×	×	○	○	×	○	×	45.40%
	食洗器	○	×	○	○	○	○	×	○	○	×	○	72.70%
	葎	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○	○	45.40%
制度化	仏壇	×	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	72.70%
	塾	小6~	小6~	×	中3~	小5~	小6~	中3~	中3~	×	中2~	小6~	
身体化	習い事	×	○野球	そろばん	空手	×	ピアノ/書道	ECC	×	×	△野球	ピアノ	
	家族と勉強	○	×	△	△	○	×	△	△	○	○	×	
	クラシック	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	
	美術館	×	×	○	×	×	○	×	○	×	×	○	
	博物館	×	×	○	○	×	○	×	○	×	×	○	
	家族旅行	○	△	△	△	×	○	○	○	○	△	○	
		aくん 大学生	bくん 大学生	cさん 中卒	dくん 中卒	eさん 高卒	fさん 大学生	gくん 高卒	hくん 高卒	iくん 大学生	jくん 大学生	筆者 大学生	
	だんじり	×	○	○	○	×	×	○	○	×	○	×	
中学楽しさ	×	△	○	○	×	×	○	○	×	△	×		
地元にいる	×	○	○	○	×	×	○	○	×	○	×		

[文献]

Phillip Brown, 2012, 『グローバル化・社会変動と教育』 東京大学出版会.
 天野正子[ほか], 2009, 『ジェンダーと教育』 岩波書店.
 荒井一博, 2007, 『学歴社会の法則 教育を経済学から見直す』, 光文社新書.
 海老原 嗣生, 2009, 『学歴の耐えられない軽さ』, 朝日新聞出版.
 大谷渡, 2002, 『大阪河内の近代』 東方出版株式会社.
 大野晃, 2008, 『限界集落と地域再生』 北海道新聞社, A5判, 313p.
 尾木直樹, 2006, 『新・学歴社会がはじまる——分断される子どもたち』, 青灯社.
 表真美, 2013, 『家庭と教育：子育て・家庭教育の現在・過去・未来』 ナカニシヤ出版.
 鹿嶋敬, 2005, 『雇用破壊 非正社員という働き方』, 岩波書店.
 片桐真弓, 2013, 『家庭教育の現在と母親たち』 尚絅大学研究紀要. A, 人文・社会科学編 (45), 1-20.
 吉川徹, 2001, 『学歴社会のローカル・トラック——地方からの大学進学』 世界思想社.
 ———, 2006, 『学歴と格差・不平等』, 東京大学出版会.
 ———, 2009, 『学歴分断社会』 ちくま新書.

- 国土交通省, 2015, 『平成 27 年度 過疎地域等条件不利地域における集落の現況把握調査報告書』.
- 市長公室広報広聴課, 1975, 『広報総集版』富田林市役所.
- スティーブン・D・レヴィット／スティーブン・J／ダブナー, 2007, 『ヤバい経済学〔増補改訂版〕』東洋経済新報社.
- 総務省, 2017, 「住民基本台帳人口移動報告 平成 29 年(2017 年)10 月結果」(2017. 12. 7 取得).
- 多賀太, 2014, 『近代日本における家庭教育の担い手に関する考察 : 経済エリートの自叙伝を資料として(II-3 部会 教育の歴史社会学(1), 研究発表 II)』日本教育社会学会大会発表要旨集録 (66), 192-193.
- 武村由美, 2017, 「『限界集落化の過程と直面する課題 - 高知県仁淀川町 (旧仁淀村) を事例に』, 高知工科大学紀要, 14(1): 55-67.
- 富田林町役場, 『町誌一斑』
- 富田林立東條小学校, 『学校要覧』
- 濱田時実, 2015, 南河内郊外における神社祭祀に関する一試論美具久留御魂神社秋季例大祭の事例から
- 濱名陽子, 2011, 「幼児教育の変化と幼児教育の社会学」『教育社会学研究』第 88 集, 87-102 頁
- ピエール・ブルデュー 石井洋二郎・訳, 1990, 『ディスタンクシオン〔社会的判断力批判〕I』
- 広田照幸, 1999, 『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書
- 藤田規一, 1955, 『富田林市誌』富田林市役所. P154
- 耳塚寛明, 2014, 『教育格差の社会学』, 有斐閣アルマ
- 宮島喬, 1994, 『文化的再生産の社会学:ブルデュー理論からの展開』藤原書店
- 森山工, 2007, 『〔資源人類学 第二巻〕資源化する文化:文化資源 使用法—植民地マダガスカルにおける「文化」の「資源化」による』弘文堂
- 吉内忠治, 1982, 『明治の頃の山村の生活』松村印刷株式会社
- 吉田壽三, 1972, 『精密住宅地図』吉田地図株式会社, P105
- 加野芳正(1953-)・越知康詞, 2012, 『新しい時代の教育社会学』ミネルヴァ書房.
- 岩井八郎(1955-)・近藤博之(1954-), 2010, 『現代教育社会学』有斐閣.
- 宮島喬, 杉原名穂子, 本田量久編, 2012, 『公正な社会とは : 教育、ジェンダー、エスニシティの視点から』
- 佐藤晴雄・栗原幸正・堀越幾男, 2009, 「家庭教育をめぐる保護者・教師の意識と行動に関する実証的研究--「つもりのしつけ」に見る家庭教育の問題性」『日本学習社会学会年報』(5): 84-92.
- 細辻恵子(1953-), 2005, 『揺らぐ社会の女性と子ども : 文化社会学的考察』世界思想社.
- 小山静子, 太田素子編, 2008, 『「育つ・学ぶ」の社会史』藤原書店
- 多賀太, 山口季音, 2015, 『近代日本における家庭教育の担い手に関する考察(2) : 大正期生まれの経済エリートの事例から(IV-3 部会 教育の歴史社会学, 研究発表 IV)』日本教育社会学会大会発表要旨集録 (67), 348-349
- 多賀太・山口季音・YAMAGUCHI Kioto, 2016, 「近代日本における家族の教育戦略に関する一

考察：旧中間層と新中間層の比較を中心に『關西大學文學論集』65(3)：135-163.
沢山美果子, 2013, 『近代家族と子育て』, 吉川弘文館
田澤実・梅崎修, 2016, 大学進学および就職時における若者の地域間移動：優秀な若者人材を地方に集めることは可能か？
本田由紀(1964-), 2008, 『「家庭教育」の隘路：子育てに強迫される母親たち』勁草書房.
濱中淳子(1974-), 2013, 『検証・学歴の効用』勁草書房.

[URL]

総務省統計局, 2015, 「学歴別に見た賃金」, (2017, 02, 16 取得, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2015/dl/03.pdf>)
Gaccom 学校教育サイト, 2016, 「富田林市立第三中学校」(2017.12.13 取得, <http://www.gaccom.jp/schools-28966/students.html>)
社会調査要綱オンライン, 「社会調査倫理綱領」(2017, 02, 16 取得, http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/00/2_1.html)
内閣府統計表, 2004, 「主要耐久消費財等の普及率(全世界)」(2017.12.7 取得, <http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/shouhi.html>)
厚生労働省, 「有期労働契約の締結、更新及び雇止めに関する記述について」(2012, 02, 12 取得, <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/12/dl/h1209-1f.pdf>)
厚生労働省, 2015, 「学歴別卒業後3年以内離職率の推移」(2017, 02, 16 取得, <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11650000-Shokugyouanteikyokuhakenyukiroudoutaisakubu/0000140596.pdf>)
全国過疎地域自立促進連盟, 「過疎市町村の数」(2017.12.12 取得, <http://www.kaso-net.or.jp/kaso-db.htm#001>)
富田林市ウェブサイト, 2017, 「統計」(2017.12.13 取得, <http://www.city.tondabayashi.osaka.jp/index.html>)
, 「刑務所入所者の学歴構成」(2017, 02, 12 取得, <http://president.jp/articles/-/17610>)
, 2014, 「貧困対策に関する政府の大綱」(2017, 02, 16 取得, http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/pdf/taikou_gaiyou.pdf)